

- 213–279. Kodansha Ltd., Tokyo.
- and Nemoto T. 2003. Erroneous records of *Lespedeza* (Leguminosae: Papilionoideae) from Japan. *J. Jpn. Bot.* **78**: 42–47.
- 大井次三郎 1953. 日本植物誌. 至文堂, 東京.
- 1965. 改訂新版日本植物誌 顕花篇. 至文堂, 東京.
- (著)・北川政夫 (改訂) 1992. 新日本植物誌 顕花篇. 改訂版. 至文堂, 東京.
- 奥山春季 1938. 日本産植物雑記 (其四). 植物研究雑誌 **14**: 340–344.
- 1968. オクシモハギ. 自然科学と博物館 **35** (9–10): 表紙写真の解説.
- 長田武正 1972. 日本帰化植物図鑑. 北隆館, 東京.
- Schindler A. K. 1913. Einige bemerkungen über *Lespedeza* Michx. und ihre nächsten Verwandten. *Bot. Jahrb.* **49**: 570–658.
- (*東北大学大学院理学研究科 附属植物園津田記念館,
^b石巻専修大学理工学部基礎理学科,
^c愛媛県立西条高校)

マメ科の新帰化植物ハナハギ (大橋広好^a, 米倉浩司^b, 小川 誠^c)
 Hiroyoshi OHASHI^a, Koji YONEKURA^b and Makoto OGAWA: A New Naturalized Legume, *Campylotropis macrocarpa*, in Japan

著者らの一人小川は2000年10月10日に高知県土佐清水市大岐下益野林道でヤマハギに似た1種を採集した。これはハナハギ *Campylotropis macrocarpa* (Bunge) Rehderであった。採集地は1993から1997年の間に工事が行われたという林道の法面である。この林道では法面にイタチハギが吹き付けられており、採集地の周辺にはブタクサ、オオキンケイギク、マツバウンランなどの帰化植物がみられた。採集地の環境状態から見て、今回発見されたものは帰化品であると考えられる。愛媛・香川県における中国産ハギ類の帰化例 (大橋2002, 大橋他 2003) から見ると、四国では近年の林道工事に際して新道路法面に中国原産のマメ科種子を散布しているようである。高知県フロラ (山中 1978) にハナハギは記録されておらず、本種は1970年代末以降、多分1993年以後に中国から持ち込まれたものと思われる。ハナハギは属としても種としても日本から初めての記録である。

ハナハギ属はハギ属に近縁で、特に閉鎖花をもたない点でヤマハギ亜属の種と非常によく似ている。しかし、花序の1節には1花だけをつけ、龍骨弁の鉤部は中央で著しく内曲し、鉤部の先が尖ることでハギ属から区別できる。その他にも花内蜜腺を欠くことやポンプ型の送粉機構をもつこともハギ属とは異なっている (Iokawa and Ohashi 2002)。ハナハギはこの属の中で最も広い分布域をもち、モン

ゴル南部、中国の中部以北および朝鮮半島に分布し、属の分布東限をなしている (Iokawa and Ohashi 2002)。

属としての特徴以外にも本種の花序軸や小花柄には蜜腺があるが、ふつうハギ属では蜜腺はない。また、本種は花序の苞葉が早落性である。今回の帰化品を見ると小葉は橢円形から広橢円形で円頭から凹頭、やや厚質で表面が無毛であることにより、花や果実がない状態ではツクシハギ *Lespedeza homoloba* Nakai と見誤るかもしれない。一般にはツクシハギに比べるとハナハギの頂小葉は鋭頭であることが多い。本種は変異に富み多型であるため、多くの近縁種や種内分類群が記載されていたが、Iokawa and Ohashi (2002) は1変種1品種に整理した。今回の帰化品は果実の側面が無毛であるため var. *macrocarpa* f. *macrocarpa* に当たる。

ハナハギの図は中国高等植物図鑑 **2**: 2663 図 (1972)、中国植物志 **41**: 26 図版 (1995) および Iokawa and Ohashi (2002) の Figs. 1, 34b, 35B にある。

Campylotropis macrocarpa (Bunge) Rehder in Sargent, Pl. Wils. **2**: 113 (1914), in nota; Icon. Cormophyt. Sin. **2**: 467, fig. 2663 (1972); Li & Chen in Fl. Reipubl. Popul. Sin. **41**: 115, pl. 26 (1995); Iokawa & H. Ohashi in J. Jpn. Bot. **77**: 267 (2002).

証拠標本：高知県土佐清水市下益野～横道、

Alt. ca. 100–200 m. 新しく造成された道路の法面に生育. 10 Oct. 2000. 小川誠 07458 (TUS 277304, TKPM 44795).

引用文献

- 中国科学院植物研究所. 1972. 中国高等植物図鑑 2. 科学出版社, 北京.
- 中国科学院中国植物志編集委員会. 1995. 中国植物志 41. 科学出版社, 北京.
- Iokawa Y. and Ohashi H. 2002. A taxonomic study of the genus *Campylotropis* (Leguminosae). J. Jpn. Bot. 77: 179–222, 251–283.
- 大橋広好 2002. 分類学私考. 分類 2: 65–73.
- 大橋広好, 根本智行, 伊藤隆之 2003. ハギ属の帰化植物 4 種. 植物研究雑誌 78: 50–54.
- 山中二男 1978. 高知県の植生と植物相. 林野弘済会高知支部, 高知.
- (*東北大学大学院理学研究科
附属植物園津田記念館
*東北大学大学院理学研究科
附属八甲田山植物実験所
*徳島県立博物館)

山形県で見出されたヤブマオモドキ (大場秀章)

Hideaki OHBA: On *Boehmeria tikusiensis* Satake in Yamagata Prefecture, Northern Honshu (Notulae ad plantas Japoniae 10)

日本海に面した山形県は、いわゆる日本海要素とよばれる植物が多く分布する。結城嘉美氏はじめ多くの地元の方々によってその植物相が調べられてきたが、まだ十分ではないようだ。最近、加藤信英氏は数多くの興味ある植物を見出され、私に研究の機会を与えてくださった。2000年には集められた多数のヤブマオ属植物を検討することができた。日本のヤブマオ属相は1930年代になって佐竹義輔により検討が加えられたが、山形県をはじめ、本州北部日本海側の同属植物については、その後包括的な研究はなされていない。

ヤブマオ属では異種との間の遺伝的隔離がゆるく、雑種を形成し、無融合生殖や栄養繁殖などで集団を広げていくことが指摘されている (矢原 1993a)。こうした植物のあり方は、有性生殖をする植物と基本的に異なるものであるが、このような植物を分類学上どのように扱うかについてはいまのところ定説がない。

矢原が進めたような解析が、日本のヤブマオ属植物の研究を進めるうえで重要であるが、本州日本海側地域のヤブマオ属については佐竹 (1936) によって形態学上の相違にもとづいて識別されてきた種のうち、どの種が産するのかさえ現段階では十分には掌握されていない。今後の一層の解析的研究への情報提供として、*Boehmeria tikusiensis* Satake (ヤブマオモドキ) が山形県に産することを報告する。

ヤブマオモドキは、佐竹 (1938) により筑前南畑村 (現、那珂川町) (中島和男 no. 6, 1937年, これがホロタイプである), 同多々羅村 (初島住彦 no. 7, 1937年), 大隈佐多村 (村松七郎 no. 6, 1936年) で採集された標本にもとづいて記載された。佐竹によれば、その特徴は瘦果はナガバヤブマオに近いが、葉はヤブマオに似ていることである。佐竹のヤブマオ属の分類体系では、瘦果の形質に重きが置かれており、本種も“この意味ではナガバヤブマオであるが、葉は厚く、且表面は稍粗華、下面に短毛が生ずるので区別される”として、新種として記載された。しかし、それ以後本種についての言及はなされてこなかったが、矢原 (1993b) は本種がナガバヤブマオの鋸歯が粗い型であり、ナガバヤブマオとは区別できない、としている。

さて、山形県で採集された植物は生きた状態でも標本でも、ヤブマオモドキから区別できない (Fig. 1)。山形県にはナガバヤブマオも分布しているが、両者は明瞭に区別できる。すなわち、この両者は葉の質が異なるほか、葉裏の中肋上や主要な側脈上に生える毛の様態が異なる。ナガバヤブマオの毛は針状で先端に向けて脈上に圧着しているが、ここでヤブマオモドキとする植物のそれは2種類ある。ひとつはナガバヤブマオ同様の針状圧着毛であるが、他はそれよりも多少長くかつ湾曲し、斜上する。同様の毛は九州で採集されたヤブ